

「令反感情歌」と『抱朴子』の〈地仙〉思想

伊 藤 理 恵

1 はじめに

「沈痾自哀文」中に語句引用された『抱朴子』は、四世紀・晋代に完成した神仙思想の書物で、それ以前よりあつた養生論に哲学的根拠を与え、仙人になるための具体的な方法を説いたものである。

この『抱朴子』と憶良作品、特に「沈痾自哀文」との関係については、既に小島憲之氏¹が字句表現方法の類似を細かく指摘し、村山出氏²は『抱朴子』の生命主義とそのため養生説に憶良が生を考えるより所を見出したことを推測している。また辰巳正明氏³も『抱朴子』の主張が憶良の作品世界の形成に大きく寄与していることを認め、増尾伸一郎氏⁴は憶良の『抱朴子』への依拠には、儒教との習合的な性格と、かつ儒教よりは徹底して生を追求する姿勢への

共感があることを指摘した。

憶良が生を考えるより所にしたであろうこの『抱朴子』が、知識人階級にも通用する知的な神仙思想の書であることは、この書が確固たる老荘の哲学をふまえていることからも知れる。しかしその思想は、例えば老荘思想の無為自然の境地や、仏教の厭世思想といった知的な精神主義一辺倒のものとは異なり、長寿や富という万人に共通する素朴な願いを大きな柱としている。また有限なる生命の永遠化に、魂の器である肉体そのものの永遠化を考える、極めて現実的で具体的な思考方法は、他の思想には見られぬまさに『抱朴子』的思考である。

さて憶良の「令反感情歌」は、従来仏教や儒家の影響が論じられてきた。しかし中西進氏が倍俗先生を作者憶良の分身ととらえ⁵、井村哲夫氏が道人方士に共感する憶良にと

つて、倍俗先生はある意味で憶良の観念的分身であると考
えたように、彼は俗に倍く先生の生き方を「感情」と考え
「反さしむ」者でありながら、その先生を完全には否定し
きれぬような複雑な表情を見せる。この複雑さに私は「抱
朴子」の影響が重大だと考えるが、憶良の「抱朴子」的思
考は、例えば倍俗先生を「意気は青雲の上に揚るといへど
も、身体は猶塵俗の中に在り」と批判する箇所にも指摘出
来る。憶良の興味は、先生の「意気」よりは「身体」その
ものにある。この極めて現実的で具体的な関心は、老荘や
仏教の哲学とは異なる、まさに「抱朴子」的な憶良の思考
方法である。

このように憶良に影響を与えたと考えられる『抱朴子』
には、地上を住居とする新しい仙人の思想、〈地仙〉思想
が説かれている。そこは住む場所が地上というだけでなく、
人間らしさを積極的に肯定する人情的な神仙界であり、一
方より良き長生のために儒家の倫理や善行を重視する知的
な面をも兼ね備えている。このような〈地仙〉思想は、憶
良の心情と倫理の双方を満足させるものだと考えられる。

憶良の作品は儒仏道の思想が複雑に交差するもので、そ
れは一つの思想で把握できるようなものではない。しかし
彼の作品の多くに貫かれた現世に生きる強い執着や意欲に
は、生の逸楽を肯定し永世を目ざす、この〈地仙〉思想を

推測する必要がある。従来仏教や儒家の思想を推測され
がちな「令反感情歌」を、『抱朴子』の〈地仙〉思想との
関わりで読み直すことが本小論の目的である。

2 憶良と俗世

惑へる情を反さしむる歌一首併せて序

或人有り。父母を敬ふことを知りて、待養を忘れ、
妻子を顧みずして、脱屣よりも軽みす。自ら倍俗先
生と称び、意気は青雲の上に揚るといへども、身体
は猶塵俗の中に在り。いまだ修行得道の聖を験さず。
蓋し是れ山澤に亡命する民ならむか。所以、三綱を
指示し、更に五教を開き、この歌を以て、其の惑ひ
を反さしめむとす。歌に曰く、
父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世間
は かくぞ道理 鶯鳥の かからはしもよ 行方知ら
ねば 穿沓を 脱き棄る如く 踏み脱きて 行くちふ
人は 石木より 生り出し人か 汝が名告らさね 天
へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大君居ます こ
の照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み 谷蟻の
さ渡る極み 聞し食す 国のまぼらぞ かにかくに
欲しきまにまに 然にはあらじか (5・八〇〇)

反歌

ひさかたの天路は遠しなほなほに家に帰りて業を為ま
さに
(5・八〇一)

作品の序文に見える「倍俗(先生)」と「塵俗」は、憶良と俗世の関わりを考えさせる表現である。まず「倍俗先生」は、俗に倍くというその名の如く、俗世の営みを顧みることなく生きる人物であるが、その人物を憶良は、修行得道を志しているものいまだ塵俗の中に留まっているのであり、とすれば社会的な責めを逃れて山沢に身を隠す人物に過ぎないと非難し、かつその惑いを反さしむるために

社会に処す思想、三綱・五教を開示する。つまり憶良は、先生のような俗世に倍く生き方を反社会的な姿と否定し、人間の当然として社会に処す必要を論ずるのであるが、しかしそう論ず憶良自身、その俗世をただ楽しいものと受け止めていないことは、父母妻子に寄せる恩愛の情を「世間にかくぞ道理」としながら、「鷗鳥のかからはしもよ」と詠まざるを得ない歌に明らかである。

ここで憶良に反社会的と批判される「倍俗先生」には、厭世的な仏教徒、もしくは道士の風貌、また山中において呪術的な修行を行うことを統制する当時の禁令等、社会背景をふまえるならば、井村哲夫氏が「日本靈異記」の役小

角と関わらせたように、神仙的な方術を行う験術者の面影を認めることが出来る。

このような厭世的な先生の生き方を論ずるのが憶良の立場であるから、先生とは逆のあり方、俗世の秩序化に勤しむような儒家の倫理的態度を推測すれば良いかというところではないと思われる。「沈痾自哀文」では山に入つて性を養う道士への共感を綴る憶良である。超俗的な倍俗先生の生き方に、共感する所があるであろう憶良が儒家の立場からそう単純に先生を批判するはずがない。

しかし作品は確かに社会に処す思想を以て先生の俗に倍く生き方を批判している。先生に共感する所がありながら、しかしそれを否定する、こういった複雑な憶良の思考方法には、「倍俗」の典故と考えられる『淮南子』の養生の道が関係している。つまり社会に処す思想が単に儒家だけのものではなく、道家にとっても重要であり、またその中でも養生を得るために社会に処すことを条件とする、養生の道こそが憶良にとつて重大であろうことを推測したい。

単豹、世に倍き俗を離れ、巖に居り谷に飲み、絲麻を衣ず、五穀を食らはず、行年七十にして、なほ童子の顔色あり。にはかにして餓虎にあふ、殺してこれを食らふ。(中略) 道を得るの士は、外は化すれども内は化せず。外化するは、人に入る所以なり。内化せざる

は、身を全うする所以なり。故に内には一定の操ありて、外は能く屈伸瀛縮巻舒して、物と推し移る。

〔淮南子〕人間訓

社会から孤立して養生する單豹がそれゆゑ餓虎の餌食になるとは、処世上の保身を無視したことが招いた不幸をわかりやすく譬えたものである。そして『淮南子』は、養生の道を得る士を俗世間に表向き感化しても内面は感化しない人物であるとし、故にそういった人物は内に固い志を持つ一方で、俗世間の事情にあわせて良く感化する柔軟性を持つのだと言う。

このように『淮南子』は、人間としてある限り俗世の営みから逃れるべきでないことを説き、社会に処しながらそこに埋没せぬ生き方を養生の最良の道と考える。憶良は先生の俗に倍く生き方に少なからずの共感を感じている。にも関わらず、はつきりと彼の俗に倍く姿勢を否定出来ることには、この『淮南子』の支えがある。つまり憶良の倍俗先生批判には、俗世に処しながら道を得る、養生の立場を認める必要があろう。

さてもう一方の「塵俗」は、「青雲の上」と対比された表現である。この「塵俗」には、俗世にあることを青雲の上の清浄な境地と比較して、汚れた塵の如くに嫌悪したであろう憶良が感じられるが、同時にここに見られる身体の

あり方への強い関心、つまりその精神というよりは肉体そのものが「塵俗」のままであることを、道を得ぬ姿と断ずることには、肉体の永遠化を目ざす神仙道と彼との繋がりを予想させる。ここに先の『淮南子』に登場した「倍世離俗」の單豹が、「離俗棄塵」の人物と表現された例をあげてみよう。

單豹、術を好み、俗を離れ、塵を棄つ。穀実を食はず、肉を食はず、肉温肉を食はずを衣身を覆ふず、身を山林、巖窟巖窟に処すを以て、其の生を全うするも其の年をつ尽さずして、虎之を食ふ。

〔呂氏春秋・孝行覽〕

先の『淮南子』とほぼ同様の内容であるが、單豹が長生の術を好む士として描かれていること、また彼の棄て離れようとする俗世が「塵俗」と表現されていることが、『淮南子』には見られぬ大きな特徴である。單豹はここでは有限なる俗世という現実を超越すべく、肉体そのものの永遠化をはかる仙道修行者として描かれている。

さてこの「塵俗」の表現には、塵の次のような意味合いを認めてもいいように思う。

人一世の間に居る 忽たること風の塵を吹くが若し

〔曹植「薤露篇」〕

人生は塵露の若し 天道は竟に悠悠

〔阮籍「詠懷詩」・八十二首（其三二）〕

人生のはかなさを塵に譬えて嘆く、このような思いが、單豹の「塵俗」と関わるであろう。なぜなら肉体の永遠化を目ざす單豹にとって、俗世は汚れたものである以前にちりけむりのようにはかないものである。つまり俗に塵の表現が付された意味には、有限なる俗世を憂う思いが重大だと考えられる。

こういった思いは憶良にも繋がるのではないか。恩愛ある俗世の営みの中に生き続けたい憶良が、その俗世を塵と表現することには、そこに永く在りたいがために有限なる現実のはかなさを憂う、先の單豹のような思いが重大であろう。憶良には「俗道は仮に合ひ即ち離れて、去り易く留まり難しといふことを悲しび嘆く詩一首并せて序」がある。この作品は、有限なる俗道（俗世）のはかなさをただひたすら嘆く作品とも読める。このように、有限なる俗世を憂う憶良の思いは他の作品にも切実なのである。

又この憂いは、もう一方の俗世を嫌悪する気持ちにも関わっていくと思われる。有限なる俗世という現実がありながらその俗世に束縛される人間の愚かさ、それを憶良は塵の如く汚れたものとして嫌悪したのではなかったか。

そしてその「塵俗」を離れ「塵俗」ならぬ理想世界へと向かう憶良の思いは、「意気」ばかりを「青雲の上」高く揚げる先生と比べて極めて現実的である。憶良は先生の

「身体」がいまだ「塵俗」に留まっている現実によって、きっぱりと彼を修行得道のしるしなしと否定するのである。しかし憶良は倍俗先生を見捨てたわけではない。憶良が開示した「三綱、五教」は、倍俗先生の得道に助言を与え協力するためのものである。

俗世に倍くことを諫める態度と、その俗世にあることを塵と表現することは、一見矛盾するようにも思われる。しかし見てきたように憶良の俗世との接し方には、有限なる俗世への歎きと長生への願いが貫かれていると読めるのである。

3 恩愛の情

律令官人の職分や、「三綱五教」で倍俗先生を諫め「業」を勧める憶良の態度が、俗世に処す儒家と関係あることは明らかである。しかし「世間はかくぞ道理」と詠む父母妻子の恩愛の情が、「道理」と理屈づけされながらも、社会に処す思想や倫理というようなものではなく、彼自身の内面よりあふれる本能的な情であることも事実である。

そもそも憶良の儒家的立場は極めて不徹底なもので、それは序文冒頭の「或人有り。父母を敬ふことを知りて、侍養を忘れ」の表現にも認められる。中西進氏は、倍俗先生が父母を養うことは知っているが、知りながら侍養を忘れ

ている人物であることに注目したが、この養うことと敬うことを比較する態度は、辰巳正明氏が既に指摘する『論語』の次のような説と関わっている。

今の孝は是れ能く養ふを謂う。犬馬に至るまで皆な能く養ふこと有り。敬せずんば何を以て別たん。

(論語・為政篇)

『論語』は、最近の「孝」が「養ふ」ことに留まりがちであることを危惧する。儒家にとって「孝」は「養ふ」ではなく「敬ふ」である。それはただ経済的に「養ふ」だけでは、動物を世話する姿勢と大差ないからで、ここには知性とか教養を人間に期待する儒家的思考が認められる。

憶良はこのような儒家の「孝」を作品に意識しているであろう。しかし彼が「感情」を感じるのは、先生が父母を養わない姿にである。それは、知的な儒家ではなく、その立場からすれば一步後退したとも思われる本能的な感情によるものである。

また憶良が仏教の影響を受け、それ故俗世の恩愛の情に苦しみながら、しかしその執着を煩惱として断ち切るほどには至らない様子にも注意したい。彼の仏教的思考も彼の儒家的思考同様の不徹底さを見せ、それは「世間はかくぞ道理」と詠んだ父母妻子の恩愛を、「鶺鴒のかからはしも行方知らねば」と表現することにも明らかである。

この「行方しらねば」の表現には、おそらく芳賀紀雄氏が指摘の次のような仏教的言説が意識されている。

子余ほかに処ところより来る。我亦余処より来る。子異処に至る。我異処に去る。我彼の去る処を知らず。彼我の去る処を知らず。彼我の来る処を知らず。我彼の来る処を知らず。是子我の所有に非ず。何すれぞ故無くしてほしまま横に愛縛を生ぜん。(『十住毘婆沙論知家過患品』)

来るところも去るところも知らぬ親子関係。その恩愛の絆に縛られる愚かさを説く。憶良の「行方知らねば」には、このような仏教の言説が関係している。しかし憶良は、親子関係が一時的な仮の姿であることを知り、そこに執着する愚かさを認識した上でなお「鶺鴒のかからはしもよ」とその教理が否定する愛縛に身を委ね苦しむ。後の「息子等歌」でも「何処より来たりしものぞ」と、子どもの存在と親子関係の不思議をいぶかる。ここでも先と同様の仮の姿である人間関係を否定する仏教的言説が意識されている。

しかしやはり憶良は「まなかひにもとなかかりて安眠し寝さぬ」と、愛縛にとらわれ夜も眠れぬ自分に苦しんでいる。憶良の内なる儒教や仏教の不徹底さは、彼自身の内面からあふれてしまう恩愛の情によるものである。そして井村哲夫氏が無智な世間蒼生の主張と指摘するように、恩愛の絆にとらわれてしまうような人間の有様を積極的に認

めようとするのが憶良であろう。故に憶良は、恩愛の情を何の躊躇もなく「穿沓を脱き棄る如く踏み脱ぎて行くちふ」倍俗先生を「石木より生り出し人か」と、人間にあらざる非情の木石に譬えて非難するのである。

しかしこの「穿沓を脱き棄る如く……」の表現には、人間倍俗先生批判だけでなく、恩愛の絆の重視と、その恩愛の絆の中に長く生き続けようとする、憶良の積極的な俗世肯定の姿勢があり、二節において検討した彼の長生の願いとも関わるもつと深い問題があると思われる。なぜならこの表現には、俗世的な恩愛の中に生きる幸福と、長生の願いを結びつけることに成功した、『抱朴子』の〈地仙〉思想の影響が見られるからであり、その点について以下に論じてゆく。

まず右の憶良の「穿沓を脱き棄る如く」には『代匠記』が指摘する、神仙思想に狂奔した武帝の次の故事がふまえられていることに注目したい。

嗚呼、吾誠に黄帝の如くなることを得ば、吾妻子を去るを観ること沓を脱くが如くならむ。

（『史記』孝武帝本紀）

後宮の女たちををひきつれ昇仙した黄帝の話聞いた武帝は、黄帝と同じようになれるなら私なら妻子を棄て去ると豪語したというのである。このように『史記』は、武帝

の昇仙願望が人間道徳に背くことを批判しているが、憶良が倍俗先生の有様を「穿沓を脱き棄る如く」と批判することには、『史記』のこのような批判意識が考えられよう。

さて『史記』が批判する妻子を棄てる行為は、後世に神仙思想も善行など徳行を奨励するようになってゆくと、その神仙思想側からも批判されることになってゆく。小島憲之氏が「穿沓を脱き棄る如く……」に指摘する『抱朴子』勤求篇には、

二親の供養を委て、妻子を捐てて恤へず。

（『抱朴子』勤求篇）

という父母妻子を顧みない仙道修行者が、神仙思想側から批判されている。

又これらの例には、仙道が自分一人の意気込みや思い込みだけで成功するものでなく、その道の達成にはまず信じらる道やその道の師匠を見極める、そういった修行者の慎重な態度が極めて重大であることが示唆されている。『史記』は神仙方を寵遇する武帝の話を多く載せるが、それによると武帝に神仙を説いた方士らはでたらめを言う人物ばかりで、仙道失敗の大きな原因はそれら偽りの説に翻弄された皇帝の愚かさによる。この問題は『抱朴子』勤求篇の例にも重大で、それはいい加減な道士（師匠）が説く仙道を信用し、誤った仙道に無駄な労力と金を費やし、さらに父

母妻子を顧みぬまでに深く仙道にのめり込む修行者の愚かさを諷めたものであった。この勤求篇と憶良との親密な関係は辰巳正明氏が詳しく論じているところだが、憶良は信じるべき師匠や道を見誤り、不幸にも道を達成できぬこのような愚かな人物を倍俗先生と重ねたのではなかったか。

しかし考えるに、仙人が地上を離れて天に昇る者であるかぎり、その仙界をめざすことは、地上での一切を棄て去る、非人間的側面があることも否めない。つまり天界に住む仙人になるということは、意識するしないに関わらず、地上の恩愛や人間感情を躊躇なく棄て去る軽やかで非人間的な部分が必要とするのであろう。

又天に昇ることを意識しないとしても、長生の思想と地上の感情は相容れないものとして説かれることが多い。例えば竹林の七賢として名高い嵇康が説く『養生論』は、世俗的な価値観や人間の感情をできる限り棄て去る、あらゆる欲望を廃した穏やかな境地が身体も心も幻妙となる境地を生み、それが長生の道だと説いている。

しかしこういった天界の仙人や養生の非人情的生き方を、人間の正直な感情から批判し、人情にかなった地上の仙界である〈地仙〉世界を誕生させた神仙思想が、『抱朴子』である。『抱朴子』はその〈地仙〉の魅力を語るに際して、まず次のような仙人批判を展開する。

古の仙を得る者、或は身に羽翼を生じて変化飛行し、人の本を失うて更に異形を受くること、雀の蛤と為り、雉の蟹と為るに似たること有りて、人道にあらざるなり。
〔抱朴子〕⁽¹⁸⁾ 对俗篇

「人の本を失うて」とある如く、従来の仙人は異人・鳥獸・魚獸のグロテスクな神々で、時に空を飛び回る超人的イメージを持っていた。しかし『抱朴子』の仙人批判は、彼らの異形性という外面によせるだけのものではなく、人性喪失という内面に向けられてゆく。故に『抱朴子』は、若し妻子を遺棄し、山沢に独り処り、邈然として人理を断絶し、塊然として木石と鄰を為すが若きは、多とするに足らざるなり。
〔同上〕⁽¹⁹⁾

と、妻子との生活を棄てて人道に違う、超俗的な従来の仙人像を挙げて、「多とするに足らざるなり」という評価を下すのである。
小島憲之氏が既に指摘したように、憶良は『抱朴子』のこの箇所を「石木より生り出し人か」の表現にふまえている。ここで憶良は倍俗先生を人間にあらざる非情の木石と譬えることによつて、彼を人性喪失の仙人や養生家に見立てるのであり、そこには〈地仙〉の立場から仙人の非情さを批判する、『抱朴子』的なものと憶良の親密さが認められる。

恩愛の情と長生願望を同時に持つ憶良が、このような人情になつたへ地仙へ思想に共感したであろうことは間違いないであろう。そして同じ長生をめざしながらも倍俗先生は、その恩愛を棄て去る非情さを持つため憶良にとつて批判の対象となつた。憶良が儒家や仏教の教理を認識しつつそこに留まる者でない理由は、恩愛の執着である。そしてその執着心こそが彼とへ地仙へ思想とを結びつけ、また長生の思いを同じくしつつ「倍俗先生」を諫める理由である。

4 憶良の業

「令反感情歌」の序文にはこうある。

三綱を指示し、更に五教を開き、之の歌を以て其の惑ひを反さしめむとす。 (令反感情歌) 序文

これに従えば「令反感情歌」には大前提として、「感情」を反さしむ「三綱五教」開示の目的があつたことが知れる。しかしこの儒家の知的な教えが歌の中では明らかに恩愛に執着する情意的・本能的なものへとその様を変え、それが儒家の社会倫理に留まらぬ人間的優しさにあふれてしまうことには、おそらく次のような『抱朴子』の影響が考えられる。

仙を求めんと欲する者は、要するに当に忠孝和順仁信

を以て本と為すべし。若し徳行修めずにして但だ方術を務むるも、皆長生を得ざるなり。

(『抱朴子』^(註) 对俗篇)

『抱朴子』の神仙思想が、思想の要に儒家の倫理そのままを取り入れていることが理解できる。『抱朴子』のへ地仙へ思想が、恩愛ある俗世に留まり人情重視の幸福な世界を目ざしながら、その一方により良き長生のためのこのような知的な儒家の倫理を取り込んでいることは、恩愛の絆の中に永く在りたい憶良の心情と、律令官人として持たねばならぬ彼の倫理観との双方を満足させるものであつたに違いない。

歌に開示するとされた憶良の「三綱五教」は、幸福な長生を目ざすこの『抱朴子』的倫理観であろう。それ故歌は、倫理的な儒家の徳目におさまらぬ素朴な人間感情にあふれてしまふのであり、それは人情を重視するへ地仙へに共通する思いである。更に『抱朴子』の影響を反歌にも推測しよう。

まず反歌が「天」と「家」(地)とを対比させることに注目すると、次のような『抱朴子』的思考が考えられる。

虚に昇るに汲汲として飛騰を以て地上に勝ると為すに
あらず。若し幸に家に止まりて死せざるべき者ならば、
亦何ぞ必ずしも速に天に登ることを求めんや。

(同上)⁽²²⁾

「天」に昇ろうと汲々としても、そこが地上に勝るとは考えられない。家にあつて今日有る楽しい生活を保つ「地仙」があるなら、人間の理想からほど遠い「天」を目ざす必要などあろうか、というのである。憶良が倍俗先生に「天道」を諦め地上の生活に戻るよう諭す理由の一つには、俗世に生きる「地仙」を天に昇る天仙以上に評価する、この「地仙」的思考が考えられるであろう。

又「天路は遠し」と詠む憶良には、天にある神仙界は遠い、と観念的に思案する様子よりは、次のような極めて具體的な「地仙」的思考を推測したい。

人にして地仙を欲せば、当に三百善を立つべし。天仙を欲せば、千二百善を立つべし。若し千一百九十九善有りて、忽ち復た中に一悪を行はば、即ち尽く前の善を失ひ、乃ち当に復た更に善数を起すべきのみ。

(同上)⁽²³⁾

善行を積む努力と仙道を結びつけた「抱朴子」は、善行や悪行の数を計算する。それによると天界への道は、千二百善をそれも一つの悪をも許さずこつこつと積み重ねる必要がある。このような、天界の遠い道のりを具体的に数える極めて具體的な「地仙」的思考を憶良の「天路は遠し」には認めても良いのではないか。

長歌の後半には、大君の支配する国土にある限り、その命のままに生きる不自由さを享受せよと詠む憶良である。こういった正しい道への生真面目な姿勢が、妻子を養い地上に生きるための「業」を勧める反歌へと繋がることは明らかである。更に正しい道を歩もうとする憶良のそういった生真面目な姿が、人間の徳の行いでもあることを考えると、その「業」には、理想世界到達のための『抱朴子』的倫理や善行の意味があることも予想出来るのである。

以上のような「抱朴子」的思考によると反歌の「業」は、神仙界を諦め地上の生活に戻ること論するための「業」ではなく、より良き神仙界（地仙）を目ざすための「業」とも考えられる。そしてそこには、倍俗先生を批判しながら暖かい理解に包んで諭し励まそうとする、憶良の優しさがある。

5 おわりに

「令反感情歌」は、赴任先の嘉摩郡において「思子等歌」「世間難住歌」の二首と同じ日に詠まれた作品で、これらを中西進氏は内容が緊密に連続した「嘉摩三部作」と称している。⁽²⁴⁾ その一首目「令反感情歌」の内容は、俗世の恩愛を棄て長生を目ざす倍俗先生を批判し、先生に俗世の中に生きることを諭すものである。しかし歌の前半で憶良

が詠むのは、恩愛の絆にとらわれる俗世の有様である。

嘉摩三部作の二首目「思子等歌」は、まさにその恩愛の絆を主題とした作品である。この作品で憶良はまず「安眠し寝さぬ」ほどの子への思いを詠む。そして反歌では、安眠を妨げるその子どもを無上の宝に勝る宝と表現する。この愛の姿こそが「令反感情歌」にも繋がる、まぎれもない憶良の真実である。憶良は苦しみを伴うほどの恩愛の絆が、一方で何にも替え難い宝であることを知っている。だからこそ俗世の営みの中に生き続けることを切望し、故に彼の長生の道は俗世を否定したものでなく、どうしても恩愛の絆のある俗世の営みの中に得る必要があった。その思いこそが本論文で検討した『抱朴子』の〈地仙〉思想との出会いとなる。

しかし憶良はこの神仙思想によって快樂ばかりの人生を期待していたとは思えない。至上の宝である恩愛の絆が、とらわれの不自由さを伴うことを十分過ぎるほどに憶良は自覚している。しかし彼は、その恩愛の絆の中に永く生き続けようとする〈地仙〉思想に共感する。このことは彼が神仙思想によって俗世の全ての煩わしさから逃れようとする者ではないことを示しているよう。憶良は俗世が絶対的快樂の場でないことを知りながら、その俗世の中で出来る限りの幸福を得ようとする者である。だからこそ俗世に生き

続け幸福を目ざす〈地仙〉思想に共感する。憶良は苦しみを伴うほどの恩愛の絆の中でしか得られぬ至上の幸福を知る者であるからこそ、恩愛の絆の中に生き続ける〈地仙〉思想を選ぶことが出来たのである。

その憶良がこの神仙思想によってまず逃れようとしたのは、「令反感情歌」の長生への願いに知れるよう有限なる俗世という現実である。そして嘉摩三部作の三首目「世間難住歌」は、まさにその思いを主題とした作品である。その内容はとどまり難き俗世のはかなさを嘆き、その俗世を離れ長生の願いを深めたものとも読める。

「令反感情歌」が俗世の恩愛を棄てて長生を目ざす「惑情」を断じ、「子らを思ふ歌」が俗世にある「愛」の絶対を詠み、「世間難住歌」が俗世の無常を嘆く。この嘉摩三部作が惑・愛・無常を主題として緊密に連続した三部作と指摘したのは中西進氏であるが、それぞれの作品の俗世との関わり方には、憶良の〈地仙〉的思考が指摘できるのでないか。つまりこの嘉摩三部作は、憶良が〈地仙〉思想との関わりで詠んだ三部作だと考えるのである。

又神仙思想の説くもう一つの大きな柱に富への願いがあ。本論ではふれることが出来なかつたが、「貧窮問答歌」の貧を厭う思いや、子どもに与える着物を得られぬ貧しさを嘆く「老身重病歌」には、憶良の富への願いが指摘でき

る。この富への願ひも彼と〈地仙〉思想との関わりを予感させるものである。

注

- (1) 小島憲之「山上憶良の述作」『上代日本文学与中国文学・中』塙書房(昭61年)
- (2) 村山出「沈痾自哀文」『山上憶良の研究』桜楓社(昭52年)
- (3) 辰巳正明「憶良と筑前」『万葉集と中国文学・二』笠間書院(93)
- (4) 増尾伸一郎「山上憶良と中国典籍」『万葉歌人と中国思想』吉川弘文館(平成9年)
- (5) 中西進「嘉摩三部作」『万葉論集巻八』講談社(96)
- (6) 井村哲夫『万葉集全注巻五』有斐閣(平成5年)
- (7) 井村哲夫『万葉集全注巻五』有斐閣(平成5年)
- (8) 土屋文明『万葉集私注』は「倍俗」について、『攷証』が出典にあげた「淮南子」『倍世離俗』の句に注目し、「此所は淮南子によつて書かれたのかも知れぬ」と詳しく説明する。
- (9) 單豹倍世離俗。巖居谷飲。不衣絲麻。不食五穀。行年七十。猶有童子之顔色。卒而遇饑虎。殺而食之。(中略)得道之士。外化而内不化。外化所以入人也。内不化所以

全身也。故内有一定之操。而外能詘伸瀛縮卷舒。與物推移。〔淮南子〕人間訓)

- (10) 單豹好術。離俗棄塵。不食穀實。不衣芮温。身處山林巖窟。以全其生。不盡其年。而虎食之。(呂氏春秋)孝行覽)
- (11) 中西進「嘉摩三部作」『万葉論集巻八』講談社(96)
- (12) 辰巳正明「3「俗道と異端」2章「俗道一家族の詩について」『万葉集と比較詩学』おうふう(平成9年)
- (13) 今之孝者。是謂能養。至於犬馬。皆能有養。不敬。何以別乎。(論語)為政篇)
- (14) 芳賀紀雄「憶良―死と愛―」(国文学昭和49年5月)
- (15) 井村哲夫『万葉集全注巻五』有斐閣(平成5年)
- (16) 小島憲之「山上憶良の述作」『上代日本文学与中国文学・中』塙書房(昭61年)
- (17) 辰巳正明「沈痾」『万葉集と中国文学・二』笠間書院(93)
- (18) 古之得仙者、或身生羽翼、變化飛行、失人之本、更受異形、有似雀之爲蛤、雉之爲蟹、非人道也。(抱朴子)対俗篇)
- (19) 若委棄妻子、獨處山澤、邈然斷絶人理、塊然與木石爲鄰、不足多也。(抱朴子)対俗篇)
- (20) 小島憲之「山上憶良の述作」『上代日本文学与中国文学・中』塙書房(昭61年)

(21) 欲求仙者、要當以忠孝和順仁信爲本。若德行不修、而但務方術、皆不得長生也。(『抱朴子』对俗篇)

(22) 本不汲汲於昇虛、以飛騰爲勝於地上也。若幸可止家而不死者、亦何必求於速登天乎。(『抱朴子』对俗篇)

(23) 人欲地仙、當立三百善、欲天仙、立千二百善。若有千一百九十九善、而忽復中行一惡、則盡失前善、乃當復更起善數耳。(『抱朴子』对俗篇)

(24) 中西進「嘉摩三部作」『万葉論集卷八』講談社(96)

(25) 中西進「嘉摩三部作」『万葉論集卷八』講談社(96)

※『抱朴子』の原文は全て、抱朴子内篇校釋(『新編諸子集成』中華書局)に拠る。書き下しは石島快隆の『抱朴子』(岩波書店・1987)を参考とした。

「上代文学」投稿規定

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文の分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 投稿論文はワープロ原稿をも認めるが、その場合にはなるべく字間・行間をゆったりと組み、表紙に四百字詰めに換算した枚数を記す。
- 4 投稿論文は原文でなく、コピー二部を送る。
- 5 投稿論文の表紙には、投稿者の住所及び勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 7 投稿論文の締切日は特に設定しない。
- 8 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 9 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定する。
- 10 投稿論文は返却しない。不採択の論文についてはその旨を通知する。